

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

初年次に将来の見通しを示し 学ぶ意欲を引き出す大学・学部

大学に入学してくるのは、学びたいことが明確な学生ばかりではない。

入学後に改めて、その学部で何を学べるのか、そのためにはどのように履修したらよいかを伝え、初年次の段階で4年間の学びの見通しを示すことにより、将来に向けた目的意識を育む二つの大学を紹介する。

初年次教育で 目的意識を醸成

自分の学びたい学問によって大学・学部・学科を選ぶ生徒は多いが、入学したばかりの学生が、学問内容を十分に理解した上で履修すべき科目を選択するのは容易ではない。科目ごとのつながりをあまり理解しないまま、単位の取りやすさなどを優先して、易きに流れてしまう恐れもある。

一方、第1志望大に合格できず、併願先に進学した学生の場合、学

びの目的意識自体が希薄なケースもある。中には、「とにかく国公立大」「A大ならどの学部・学科でもいい」といった学生もいるのが現状だ。

「その学部・学科で何が学べるか」「4年間でどのように学んでいくのか」「カリキュラムはどのような意図で組まれているか」を、入学後の早い段階で学生に伝えることは、どの学生にも必要性の高いことと言える。文部科学省の調査によると、84・4%の大学が初年次教育を実施しており、その76%が「学問や大学教育全般に対する動機・

方向付け関連」の取り組みを行っている(図1)。今回は、初年次教育を通して学びの内容や将来の見通しを示し、学生の意欲を引き出すことに成功した事例を紹介する。

学びの方向性と 学び方をセットで示す

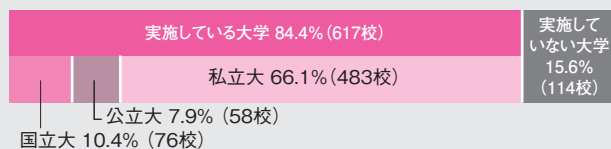
山形大
スタートアップセミナー

◎課題意識と狙い

山形大は2010年度、教養教育改革を行った。その背景は主に二つある。

一つは、「とにかく国立大」とい

図1 初年次教育の実施状況



◎初年次教育の具体的な取り組みの上位3つ

- ・レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム (約86%)
- ・プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム (約79%)
- ・学問や大学教育全般に対する動機付けのためのプログラム (約76%)

*2009年度時点 *大学院大学は対象としない

出典/文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」

う意識が強く、学部・学科にこだわらずに入学してくる学生が少なくないことになった。人文学部の立松潔教授は次のように話す。

「学びたいことが明確な学生もいますが、センター試験の結果を見て出願先の学部・学科を学内で変えたという学生もいます。極端な例ですが、第1志望は人文学部だったのが、センター試験後、理系の学科に変更した学生がいたと聞きました。学部・学科のことを深く知らずに入学する学生が現実にいるのです。学生が専門教育に意欲的に臨んで学びを充実させるために、問題意識を早めにしたせることが必要なのです」

二つめは、教養教育の授業において、教員は教えたいことだけを教え、学生は履修すべき科目を履修していない状況にあった点だ。学生に共通して学ばせるべき内容は何かを再検討する必要があった。

◎ 取り組み内容

教養教育の新しいカリキュラムでは、1年次の前期に必修科目として「スタートアップセミナー」を新設した。目的は、大学4年間の学びの目的意識を醸成すること、レポート

の書き方やグループワークの進め方など、大学での学びに必要な基礎技能を身に付けさせることだ。そのために、全学部共通の学生用テキスト『なせば成る！』と、教員用指導マニュアル『なさねば成らぬ！』を作成。授業内容は学部・学科の状況に合わせて設定することにした。

「スタートアップセミナー」を活用して、学生の目的意識を醸成しているのが、工学部システム創成工学科だ。国立大初のフレックスコース（*1）として10年度に誕生した同学科は、工学部が開講する全ての科目を履修できるのが大きな特徴だ。2年次からは、他学科の中から興味のある分野を選んで専攻する。古川英光准教授は次のように話す。

「入学時点で目的意識が明確な学生も1〜2割程度はいます。しかし、2年次から分野を選択できるとはいっても、実際に学生が考え、明確な意図を持ってコースを選べるかという疑問がありました。そこで『スタートアップセミナー』を利用して、学びの動機付けや将来のキャリア意識を高めていこうと考えました」

授業では、社会の第一線で活躍する企業人の講演後、学生6〜7人が一つのグループになり、ディスカッションしながら講演者の仕事内容、仕事の魅力などをまとめ、グループごとに発表する。これをその後の専攻につながる3分野について計3回行う。

古川准教授は、「それまで関心がなかった分野でもきちんと向き合わせることで、学生の視野を広げることが狙いです」と説明する。システム創成工学科2年の鈴木沙耶さんは、「私は機械と化学の両方に関心があり、そのどちらも学べるこの学科を選びました。『スタートアップセミナー』を通して、更に興味の幅が広がりました」と話す。

発表には他学科の教員も参加し、「電気電子工学科ではその内容は勉強できない」「それなら情報より物質を勉強した方が良い」とアドバイスをもらう。そして、総仕上げとして、学生一人ひとりが自分のロールモデルをまとめる（図2）。

1年次の後期は「キャリアパスセミナー」が必修科目となる。ここで全分野の研究室を見学し、12月の専

図2 山形大 ロールモデルづくりで使うワークシート

*同大学の資料をそのまま掲載（ワークシートは志村勉教授の作成）

攻選択で専攻分野を決定するが、定員は設けておらず、学生は選んだ分野を必ず学べるようになっている。

◎ 成果と課題

全学で実施した学生アンケートの結果では、「自分が所属する学部・学科への理解を深めることが出来ましたか」の問いに、10年度は64.3%、11年度は74.0%が肯定的な回答をした。また、システム創成工学科では「スタートアップセミナー」を通して将来の目標と学ぶ内容を明確に結び付けられるため、意欲的に学ぶ姿がよく見られるように

*1 昼夜間開講のコース

なったという。

「今後の課題は、各学部・学科の工夫を互いに共有することです。10年度には教員研修でいくつかの学部に取り組みを発表してもらいましたが、そうした場を今後も設けていく予定です」（立松教授）

ガイダンスと必修科目で 学びの道筋を明確に示す

青山学院大経済学部
現代経済デザイン学科

◎課題意識と狙い

青山学院大経済学部の現代経済デザイン学科は、08年度に新設された学科だ。「公共性の考えに基づいた新しい社会経済システムを提案できる人材」の育成を掲げているが、新学科のため、学びの内容が受験生に伝わりにくいという課題があった。初年時に新入生対象に行ったアンケートでは、指定校推薦入試での合格者は学科内容を理解していたが、学内併願やセンター試験利用方式での入学者の中には学科の内容をほとんど調べていないケースもあった。実際、3年の岩谷浩平さんは「MARCH（*2）以上の大学に入学し

たいと考えてセンター試験利用方式で出願しました。この学科にこだわりはありませんでした」と率直に語る。このような状況のため、早い段階で学科の内容を伝え、学びの目的意識を高めることが必須であった。

◎取り組み内容

同学科では、ガイダンスを繰り返し行い、学生を支援する。1年次には、4月に履修ガイダンス、5月に修学オリエンテーション、12月にコース登録ガイダンスを開き、ここで何を学べるのか、現時点での学びはカリキュラムのどの位置にあるのかを、その都度伝える。毎回、学科専任の教員約10人全員で説明するものが基本で、壇上から話すだけでなく、学生の中に入って個別に相談に応じる。3年の稲垣有弥さんは、「ガイダンスが他学科より多く、同じ内容を何度も説明されました。そのおかげで、入学前は学科で何を学ぶのか漠然としていましたが、少しずつはつきりしていきまし」と話す。1年次前期の必修科目「総合講義」も学科の内容を伝える場だ。専任教員10人が1回ずつリレー方式で自分の専門分野を講義する。

1年次前期には週2回の講義と週1回の演習で「ミクロ経済学」を集中的に教える。宮原勝一教授は「この内容は1年生にとって難しいものですが、本学科の学びの基礎になるのであえて設置しました。本学科のカリキュラムは、ゼミを中心に設定しています。3年次からゼミで学ぶために必要な科目を1・2年次に配置しているため、1年次から必修科目が多いのが特徴です。目的までの道筋を示すと共に、学生が4年間の学びを振り返った時に『自分はこれを勉強した』と言えるようになってもらうためです」と説明する（図3）。

学生は学年が上がるにつれて、ミクロ経済学を1年次で学んだメリットを実感するようだ。岩谷さんは、「他の講義を受けていて、ミクロ経済学で学んだ内容とつながっていると感じることがよくあります。1年次に自由に科目を選択していいと言われても何を学べばいいかわかりません。後につながる科目が必修と

図3 青山学院大 現代経済デザイン学科の4年間の学び



4年間の学びの流れ。2年次後期に2コースに分かれるが、コースが3年次のゼミに直結する流れをつくっている *同大学の資料を基に編集部で作成

なっていて良かったと思います」と話す。教員間での指導内容の連携も図る。例えば、1年次前期の「ミクロ経済学」は1年次後期の「公共経済学」「地域経済学」と内容が関連するため、教員によって説明方法が異なると混乱する学生が出てくる。そこで、何をどう説明したかなどを教員間で情報共有している。

*2 明治大 (M)、青山学院大 (A)、立教大 (R)、中央大 (C)、法政大 (H) の呼称

漠然としていた学びの道筋が
明確になっていった



山形大工学部システム創成工
学科バイオ化学工学コース2
年
若林 雅貴
(山形県立寒河江高校卒業)

私は、センター試験後に高校の先生からシステム創成工学科を紹介されて初めて知り、出願を決めました。「山形大に行きたい」と思っていたものの、入学当初、何を専攻したいかはっきりしていなかったため、「スタートアップセミナー」は大いに役立ちました。特に、グループ学習ではメンバーに機械が好きな人もいれば化学が得意な人もいて、自分がそれほど興味がなかった分野の話聞くことが出来ました。これが私にとって大きな刺激となりました。

ロールモデルを考えていた時に、バイオテクノロジーでがん治療をする記事をインターネットで見つけました。これをきっかけに、将来はバイオテクノロジーを使う医療関連の研究をしたいと思うようになりました。専攻分野はバイオ化学工学分野か物質化学工学分野かで迷いました。この二つの内容は似ているからです。「キャリアパスセミナー」で、バイオの研究室が再生医療の研究をしていることを知り、これが自分のやりたいことだと思ってバイオ化学工学を専攻に選びました。

1年次の基礎固めが
3年次の今の土台となった



青山学院大経済学部現代経済
デザイン学科公共コース3年
保坂 春菜
(東京都立白鷗高校卒業)

私は指定校推薦入試で現代経済デザイン学科に入学しました。公共や地域について幅広く学べるだけでなく、多くの必修科目で基礎を磨けることが将来に役立つと思ったからです。

実際、学内の他学部比べて必修科目が多く、他に受けたい授業があっても選べない面もありました。しかし、1年次から基礎をしっかりと身に付けた結果、3年生の今、どの科目を取ってもスムーズに学習できていると実感しています。特に1年次の前期に週3コマあった「ミクロ経済学」は、それ以降のいろいろな科目と関連があり、しっかりと勉強しておいて良かったです。

年に何度も開かれるガイダンスは、先生が一方的に話すだけではありませんでした。いくつもの小さいテーブルを学生が囲み、先生がテーブルを回って話しに来てくれました。そこで勉強のことやコース選択のことなどを直接相談できたのが良かったと思います。ガイダンスでの先輩のアドバイスも、コース選びやゼミ選びの参考になりました。

◎ 成果と課題

学生アンケートの結果、学年が上がるにつれて意欲や自主性、適応力といった項目の回答が向上する傾向が見られるなど、取り組みの成果が表れ始めている。稲垣さんは、「大学でこれほど教授と接する機会が多いとは思いませんでした。ゼミ選びに向けて、学問内容だけでなく先生の人柄も分かって良かったです」と話す。

課題は、ガイダンスなどに出席しない学生をどう学びに引き込むかだ。今後、インターネットの活用を含めて、働き掛けを工夫していく考えだ。

進路指導に生かす

1・2年次の科目履修の
考え方をチェック

従来の大学教育は、学生が学びたいものを自由に選ばせるといって、学生の自主性に任せる形が一般的だった。山形大の学生アンケートでも、自由に選択できる科目の方が必修科目より満足度が高い傾向があるといえる。

しかし、大学が用意した科目から

学生が好きなものを選んでいくだけでは、自分が何を学んできたのか卒業時に体系的に語れないことも多い。逆に、履修歴に筋が通っていれば、自分が何を学んできたかをアピールできるだろう。「あのゼミに入るのであれば、この科目が役立つ」「将来の学びのあの部分につながるから、今、これを勉強している」という見通しやカリキュラムの意図を大学が示すかどうかで、学生の意欲が大きく左右されるはずだ。

こうした取り組みの確認ポイントは、大学がどのような考えで1・2年次の教養・基礎科目を履修させているかにある。単なる履修登録のためのガイダンスだけでなく、今回の2大学のような取り組みがあるかを確認するのは有効だ。カリキュラムが整っていることを前提として、4年間の学びをどう意識させるのか、学生にどんな働き掛けをしているのかを見ておく必要があるだろう。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎ 今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。
e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp